

事業紹介

保護者の声から実現！

障がい児の居場所づくり

私たちの声が事業化されやすいことが、協同労働の良さのひとつだと小川さんは言います。そのひとつの例としてお話されたのが、板橋区高島平にある放課後等デイ「もちの木」。平成23年に立ち上がった板橋区の放課後等デイです。学童クラブなど、放課後に障がい児が利用できる居場所は、立ち上げ時には板橋区にほとんどありませんでした。障がい児の保護者から相談があり、保護者の方たちが中心となって、共に実現に向かい、みごと開設することができま

した。「もちの木」の実現をきっかけに、板橋区にも徐々に放課後等デイが増えてきています。立ち上げには、いくつかの課題があったそうです。そのひとつが資金の問題。利用する築40年の建物の改築など、出資金だけではとても賄うことができません。そこで、保護者と共に板橋区に相談し、障がい者関連事業に関わる施設修繕費として約700万円の助成金を受けることができました。

ワーカーズコープでは「利用者や地域の方と一緒につくっていく」という思いがあります。この事業では、協力債（少額の出資）の制度を通して、多くの方に関わってもらえるようにしています。こういった取組みも保護者の方の集まり（親の会）を中心に行われています。地域の方への説明や必要な資金を集めると

いったことは、多くはない組合員だけで行うことは難しく、実現にあたっては保護者の力はとても大きかったと小川さんは言います。

放課後等デイは、全国的にとっても必要とされています。障がい児の待機児童数も多く、これから増やしていく必要があります。また、この放課後等デイも18歳までの利用のため、18歳からは働くか家にいるかしかなかったり、そこで、18歳からの居場所づくりとして、障がい児の就労支援事業もつくっていくようとしています。保護者の「子どもたちの居場所がほしい」という強い思いから実現された「もちの木」。このように、地域が必要だと思うものを事業として立ち上げています。

ミツバチ事業で

環境を考える

現在、小川さんが板橋区でも実現したいと考えている事業のひとつが「ミツバチ事業」です。これは千葉県の神崎町ですで行われている取り組みです。成田空港付近にミツバチの巣箱を置かせてもらい、神崎産はちみつを採取しています。小川さんはこのミツバチ事業を実現することにより「環境に関する意識づけ」をしたいと言います。

ミツバチがはちみつを集めるには多くの花が必要です。ミツバチが住みやすい環境をつくること、板橋区の自然と緑を守る手助けとなります。また、ハチに関する知識を得るための専門家との連携や、採取したはちみつを商品化するために商店街と協力したりと、ミツバチ事業を通して「人とのつながり」が生まれると考えています。巣箱を置ける場所が板橋区内になかなか見つからないことが現在の課題。「ミツバチが人と緑をつなぐ役割ができる」と、小川さんはミツバチ事業の実現を目指しています。

